

竜星に毒されて

原作:緋色才架

はじめに

ある学者は竜星「聖杯」が魔素という物質を異常な量含有していることを看破した。それを受け人間が対策を作り出した祖龍1鱗と源竜2鱗という人工生物。そしてこれは、莫大な魔素を起因とし発生した環境変動を「りゅう」を用いて強引に抑制した余波の出来事群である。

資料作成:倉利真宏

イラストや小説の制作を行う創作者。

SKIMA→<https://skima.jp/profile?id=157930>

魔法関連用語集

魔素

光に乗るモノ。水溶性であり、水の運動量が多いほどに溶解度が高くなる。飽和状態まで魔素を水に溶かし、それ以上に魔素を注入すると水を伴って結晶化するものである。条件を整えることで様々な現象を引き起こすことが可能である。その条件とはすなわち魔法や魔技である。魔素は水蒸気などにも溶け込むことが出来、それが濃い霧になったものは瘴気といわれる。DO.20以後、太陽と月にはこの魔素の大きな塊が定着し、陽光・月光にのって地上へ降り注いでいる。これらはDO.20当初は地上生物のすべてにとって害をなす存在であった。この魔素に適応した生物が魔族である。

因みに、魔素からより個体が利用しやすく吸収したもののが魔力である。

魔石

魔素或いは魔力が水(H₂O)に溶けて結晶化するまで蓄積されたもの。外部からエネルギー(圧力、熱など)を与えることで液体化することもあるが、光を当てることで魔素を取り出す方法もある。

魔法物質

魔素を起因として変化変質した各種化合物を魔法金属などと呼び、さらに加工を加えたものを魔薬品、魔法道具、魔法武具、魔眼と呼ばれる場合がある。

魔法

術者が精霊との魔力を用いた魔法現象。魔術と比べてさじ加減が難しいものの、時代が進むにつれてできることが大きく増えていく。

魔術

魔法を解析して、精霊を用いず魔法現象を扱う技術。物質を用いて精霊の代わりを為して魔力を用いる技術である。杖や魔法陣といった媒介により決まった行動しか取れないもののその効果自体は正確である。

魔法屋

魔法現象の研究、利用、売買など多目的な魔法現象を扱った職を全般的に魔法屋と言う。魔道士や魔法士、魔術師等が存在する。

純魔力生物

別称で精霊と呼ばれる、地球原産の新たな系統を作り上げている生物。限度はあるが、魔素が濃い場所でも生存が可能で、条件が揃うと、肉体を持ち活動する場合もある。

特異体質

魔眼や転生者など様々な形で現れる、魔族寄りの身体的異常。エリクサーを服用した場合それらの体質がなくなることが多い。

種族について

魔素が登場して以来、世界に生息する知的生命体は人間のみではなくなった。魔素に適合した新生物、魔法生物が産声をあげ、世界を変えた。竜種、木人、土人、吸血鬼、獣人、悪魔、魔族、人狼、人工魔族……世界はこれらの魔族ないし亜人が闊歩し、戦い、時には共存し共栄する世界となったのである。

「魔族」とは？

魔法生物とも。魔素がなければ生存困難にまで魔素に適応した生物。一般的に魔獣や亜人という区別で呼ばれる。

「亜人」とは？

魔族の中でもとりわけ、人に擬態できる様々な生き物である。人間社会に潜り込んでいた最初期の呼び方の名残の名称である。

人間とニンゲンそして悪魔

魔素到来以降、魔素は多くの生き物に影響を与えた。ほんの微量で多くの生き物にとって毒足りえる魔素に適応できたものだけが生き残ったためだ。人間とて例外ではない。人間は、多くの者は姿形はそのままでも魔素を体外に代謝をもって排出するニンゲンへと置き換わっていくものが非常に多かった。しかし、魔素の影響で肉体に大きく変化が現れ、角や非常に硬質な皮膚といった副次器官や表面的ではないにしても、何の道具も使わず魔術を扱える個体がごくまれに生まれ、それらほとんどすべてが、悪魔と称される存在である。

竜種

「竜種について」を参照。

種族①

木人

例え他のコミュニティが犠牲になってもより長く、木人のコミュニティを生存し、維持し、運営することを目的とした種族。基本的に世界樹を管理し上位木人を幹部組織に置く軍事中心の組織。防衛要塞「世界樹」の管理運営、輸出するために統治機構を構成している。常に人口の5%ほどの上位木人が組織の運営等を行っており、通常の木人は上位木人に遣える上位グループ(部族)を形成し、さらにその木人に遣える人や虫人が属する下位グループ(奴隸或いは使用人および代用重機)を守護、管理している。

土人

個々が良く生きて、良く死ぬことを良しとした種族。種族の工房などに幾つかの大きな工房と小さいながらも独自の技術、何らかの異常を持っている力ある工房を中心に一部の商人や、職人が協会を作り大枠は国として運営している組織。機械科学を中心に発展した魔法技術を得意とし、複数の魔法生物及び魔術道具の精製技術を保持している。また、採掘、再利用技術も非常に優れている。他種族からすれば異常なほど臓器が強く多くの者が小太りに見えるほどの筋肉を有している。またその影響で木人ほどではないが魔力に富み力が強い。

吸血鬼

よく生き、個性を尊重することを良しとする種族。それはともかく家畜や市民はそれなりに大切にせよとされている。議会制の国を形成しており、議員が法案、市政の状況などを議題とし議論を行う。なお、軍属と議員は兼任可能でよく、軍部の人々が議席を確保するために動く。軍部が強いか、議会が強いか、役所が強いかは時代によって異なる。吸血鬼には最上位から下位まで様々で、基本能力の強さも異なる。体内の魔力濃度によって階級が分かれる。

獣人

世界は弱肉強食であるという思想を持つ種族。DO500年代初頭、元々アフリカ大陸に存在していた一部の魔族が独立し、似たような体を持つ者同士が群れを作り部族として成立させている種族。部族ごとにシステム体系が大きく異なる。ちなみに、獣人とは言われているがその姿たちは様々で亞人もいればそうでないものも非常に多い。亞人の定義が、人に擬態できる魔族という観点から人に近い輪郭はしているものの、整形でもしない限り擬態できないということだからだそうだ。姿形が様々なことでわかりやすい強さが社会的地位の重要性に直結しており、計略や交渉は二の次であると社会的にみられている。

種族②

悪魔

契約を順守することを良しとした種族。

D.O. 600以降、永世中立姉妹都市ソドムとゴモラを作り独自の技術発展に努め副産物を売却することで商売を行う、人間の魔族の一種。なお、人間の魔族も何種類か存在するが、体が変化しまだ思考能力を残っているものを総じて悪魔と呼ぶが、絶対数が少ない。年代が進むにつれて生まれる数も減少する。能力は個体差が大きい。

交渉と交易で発展を続ける都市がソドム、生産と研究を続け高度な技術を持つ都市がゴモラである。ゴモラは魔法のような化学がまだ発展している地球唯一の場所でもある。

魔族

義に厚く、力を敬う集団勢力。ユーラシア大陸北部全域を中心に、アメリカ大陸北部や中東からアフリカ大陸の一部まで時代によって領域の大きさは大きく異なるが、一定の大きさを常に保ち続ける勢力である。群れによって社会構造は全く異なるものの、群れ同士が強力な一個体『魔王』のもとに集い国を形成している。

複数の様々な魔力によって進化した生き物たちの勢力であり、竜種と一部の純魔力生命体を除いた種族が帰属する可能性がある勢力であるため、非常に幅が広く他種族にできることはできる者が基本的にいる。

精霊

下位から最下位の雑多なモノなら世界中、多い少ないの差異はある、太陽光、月光が届く範囲になら生きている、純魔力生物。魔力量が階位に直結しており、基本的に中位以上になると意思がはっきりし始め、場合によっては人語を解する知的生命となる。下位でも一部の例外は、知的生命体と言える。

事実的な世界で最も繁栄している生物群だが、ある意味で虫や細菌と言ったモノが近い場合もある。地球原産の系統樹とは別枠。

人工魔族

四鱗目の龍「エキドナ」によって作り替えられた生物群の総称。オーストラリア大陸上空及び地上を中心に繁栄しており「エキドナ」を中心に据えた社会体制を敷いている。その体は、別種の生き物から点でバラバラな、要素を取り出しており体に当たる部分が二つ以上接続されることも頻繁に発生し、結果、半人半馬のケンタウロス、多頭の怪物キメラなどがざらに発生するのがこの種である。

海魔

タコやイカの魔族を上位種に据え、魚類の魔族を全般を一般労働に据え、ク・リトル・リトルを主神に崇める宗教組織「海人教」の最高位神官の階級「ダゴン」が指揮権を持つ、他民族連合宗教国家。

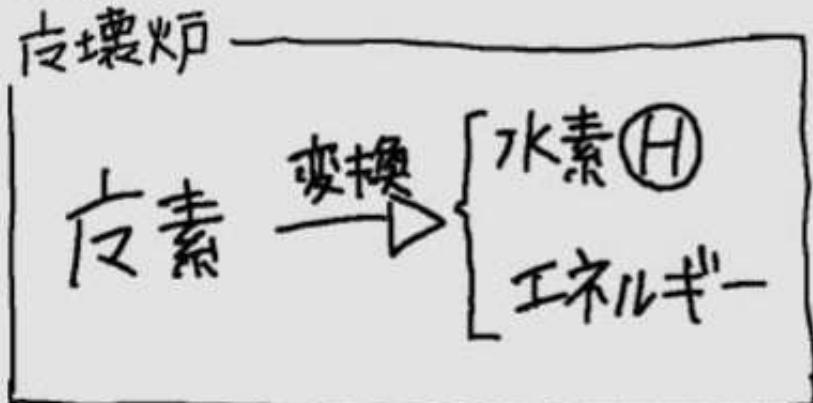
「りゅう」とは

人工的に生成された存在、生物。独自の体内機関「魔壊炉」を保有しており、魔力が産み落とされた後の世界での地球環境の維持を目的としている。魔力が産み落とされる以前に、魔力が到来することを察知した人間が、魔力自体を危険視し作成した。一鱗、二鱗と数えられる。

「魔壊炉」とは

竜種は魔素を水素(H)に変換することができ、その際に大きなエネルギー(熱量)を得ることが出来る。この工程を“魔壊”と呼ぶ。魔壊炉とはこれを行う竜種の体内器官の呼称である。世代階位が上の竜種ほどエネルギーを獲得する効率が高くなる。竜種の大半はこの器官を保持している。

竜種はいつの時代においても北極圏・南極大陸を領地として確保しているが、これはこの魔壊炉の魔壊工程において発生する熱量を貯めこまないために寒冷地を休息の地としたいがためである。



祖龍と源龍

祖龍と源龍とは最初期に創られた竜種であり他とは区別して龍の文字を使用して表す。

100年に一度の繁殖期を持ち、單一生殖が可能である。祖龍一代目はどのようなもの、存在、現象でも食べることが出来る。彼はその食事の内容次第で繁殖を行う。繁殖期生殖活動という言葉を借りてはいるが、彼が生み出す龍は現象の具現といつても過言ではない。彼は自身のサイズを自在に変えるられる。アリ程度の小ささからシロナガスクジラ程度の大きさまで自由自在である。宇宙空間のような場所でも自在に動き回ることが出来る。

源龍とは、人間によって創られた二鱗目、三鱗目の竜種のことである。因みに四鱗目は「エキドナ」である。

二鱗には雌雄が存在し、50年に一度の繁殖期がある。それによって生み出された龍は時代の軍事環境において求められている兵器を作り出すような本能を持っている。

竜種について

魔素を減ぼすことを目的とし、そのためには自らの命を投げ出すことも厭わない種族。

基本的に第一世代竜種が統制を取り、群れと縄張りを作つて生活している。時折発生する、第一世代より優秀な第二世代以降が群れを作る場合もあるが根本数が非常に少ない。死そのものに一切の忌避感がなく、自分以外の誰かが事(魔素を亡ぼす)を為しても良いし自分がやっていることに影響がない、または効率がよく早期に解決できる見込みがあるのなら自分の考えを曲げてそちらに着くことが是とされる考え方が根付いている。その上で源竜が産卵期を迎えたならば種族総出で補助し竜災に備えて行動する。なお第一世代でも特に強いものが竜王を名乗り多くの竜種を統制を取るのがDo360以降の通例である。

基本能力

大きさは生息地域により様々。魔壊炉を部分的に解放し非常に強力な放熱を伴う熱線、体外での魔壊の連鎖を放てる。これを竜砲と呼称する。

地上……翼の生えたものは飛行が可能であり生えていないものはより重く硬く速く動くことに特化している。

空……手足の代わりに翼だけが複数生えた竜種が大空を常に飛び続ける。飛ぶ速度は非常に早い。

海……嗅覚視覚ともに非常に優れているがそれ以上に聴覚にが非常に優れた個体が非常に多い。

宇宙……聴覚、嗅覚が非常に劣っておりその代わり視覚が非常に発達している。対最上位精霊を目的としているため、地球上の竜種とは規格が別物である。

竜王

竜種の中でも特殊な個体群を指し示し、主に第一から第二世代の一部の竜種が区分として扱われる、称号兼二つ名で有る。竜種の中で群を形成し行動を起こす者が竜王〇〇と言った形で称号と名前で呼ばれる事が多くなる。

特異種

大量の魔壊炉を保有し小竜を生み出し続ける竜『無尽竜』やヒトに近い容貌の小型の竜『竜人』などが存在する。

無尽竜は別名無尽機雷と呼称され、非常に危険な竜である。竜人は投擲に優れている。

三鱗の龍が作られた後、同じ技術で作られた種、エキドナという龍が存在する。人工魔族の生みの親である。

英國について

人間と精霊が多く住まう西方の島国、ブリテン。

国自体が『楔』によって形作られた巨大迷宮であり、騎士と円卓の騎士とアーサー王によって守護されている。

アーサー王

魔法の剣エクスカリバーと「鞘」そして数多の宝物を装備して戦うブリテンの象徴。装備品を欠かさないかぎりほぼ無敵である。肉体を失えど蘇る。

エクスカリバー

ブリテンの保有する3本の魔法の剣。2本はアーサー王が持ち、1本は円卓の騎士のガヴェインの席に着いた者が継承する。この3本はそれぞれ由来の違う別物。

鞘

アヴァロンと接続しており、普段はアヴァロンから魔力を受け取りアーサー王に送る受信機として、緊急時にはアーサー王のゴースト優先とし鞘を含めた宝物の数々をアヴァロンに送還する送信機としての機能を有する便利アイテム。

アヴァロン

バッキンガム宮殿地下の空間を引き伸ばしたり別所に接続したり等して作り出された異境。

マーリンやモルガン等の強大な魔法使いと精霊によって維持されており、英國の魔力保管庫とアーサー王の休養地を兼ねる。

楔

一種の寄生迷宮であり、ブリテン国内の迷宮から魔力を吸収しアヴァロンに送る。送られた魔力はブリテン国内各地の『煙突』から水蒸気に溶け込ませられて放出される。

騎士

『アーサー王の円卓』と呼ばれる円卓状の魔法道具に選ばれた英國民。円卓がアーサー王との契約をサポートし、契約者は力を貸与される。

円卓の周囲に配置された椅子型の魔法道具に座ることを許された騎士のことを円卓の騎士と呼ぶ。彼らはアーサー王伝説の騎士の二つ名を与えられ、アーサー王との更なる契約を結ぶ。

マーリン

マーリンとは英國における最高の魔法屋としての称号でありつつ、同時に騒がせの中心としての意味合いも非常に強い。そのため何度もやらかしたり、同時にとんでもない発見、発明、再現をやらかすと『永世マリーン』と言った称号を付与される者もしばしばいる。

年表①

「DO」とは

竜暦。DoragonOccasionの略字。

竜族が人類と邂逅した後、現在まで使われる暦の呼称。

DO.-50

暁星「聖杯」が接近。祖龍1鱗と源竜2鱗が人類によって創られる。

またその影響で地上に微量の基本魔法起動燃料《エーテル或は魔力》が散布され、地球で亜人が誕生する。

DO.0

源竜の繁殖期に入り多くの竜種が数多く産み落とされ、コミュニティを作り、社会構造を生成した。そしてわずか数日で国を飲み込んでみせたのである。

その他、多くの、亜人が社会構造に食い込んでいた国に攻め入り世界に覇をなした。

DO.20

源竜によって作られた宙竜によって暁星「聖杯」を破壊する動きを竜種が示し実行に移すも、「聖杯」周辺にすでに大量に発生していた最上位精霊の抵抗にあい失敗。「聖杯」を砕き2つの巨大な塊にすることはできたものの、追撃は行えず太陽と月に「聖杯」が落下する。

この際、大量の基本魔法起動燃料が地球に飛散し人型亜人「魔人」及び「魔法使い」が生まれる。

また、木人、大木人、土人、屑人、鳥人、魚人などの亜人が大量に発生し始めコミュニティを形成。

DO.23

魚人の一部と深海魚人により固形化エーテルが発見されるも、コミュニティ内で厳戒態勢を敷き、他種族への流出を防いだ。また、独自に大規模魔法の個人行使の利便性強化実験を開始する。

DO.28

竜種に魚人と深海魚人の集落の一部が襲撃された際に数多くの固形化エーテルが流出し、一部海岸に漂着し多くの種族に発見される。これにより、亜人にしか使用できなかった「魔法」が、固形エーテルを用いる事により「魔術」として再現可能になる。

年表②

DO.30

魔術の一般化が進む。

太陽や月の光に乗ってエーテルが地球に降り注ぎ続けた結果、「魔力中毒症」患者が続出。その中、中途半端に適応した結果、種の枠組みから大きく外れ、数多くの魔獣が発生。一匹の猪型魔獣、後の「魔王」によって隠密に長けた魔獣部隊が生成され、ひそかに人類の空白地に集合してゆく。

DO.32～

DO.34

竜種と魔獣の戦争が勃発。

魔獣側の勝利に終わり、一部の竜種のみ知る魔獣の国が作られる。

DO.35

魔獣が生活圏の奪い合いに本格介入を始める。竜種、人類圏両者に宣戦布告し、生存区域を大幅に広げた。

その際、人類は大きく疲弊し、後に起こる「亞人大戦」の際に、さらに生活区域を削り取られることになる

DO.38～

DO.49

木人と土人、魚人による亞人たちによる密約が結ばれる。この時点ですでに人間の生活区域を侵食し、どの程度まで割譲させあうか、考えていた模様。以後、鳥人や鱗人、牛人などの数多くの亞人が、国家を作る礎となった密約であるとされる。この年に「秦」「モラトーク王国」「九頭龍神国」の三ヶ国が生まれ、次々と亞人の国家が誕生する。これは、「黒い森」と自称する吸血鬼ヴァンパイアの国家が最後に台頭するまで続く。

DO.50

始龍が竜種を率いて世界を荒らして回る。ちょうど祖龍と源龍の繁殖期が被り、通称「龍撃」と言われる現象が発生。この結果、竜種の生存区域が大きく拡張され多くの亞人と、金に目のくらんだ人間、そして、始龍と多数の竜種が死亡。多くの疫病を世界にまき散らされた。比較的被害の少なかった「秦」と人間のいくつかの国が戦争を起こすものの、一進一退の泥仕合をつづける。